HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ルーマニア語における ”pe” 構文の統語構造
Author(s)	藤田, 健
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 110, 89-112
Issue Date	2003-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34045
Type	departmental bulletin paper
File Information	110_PL89-112.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 110 (2003)

ルーマニア語における〝pe〟構文の統語構造

藤田　健

0．導入

ルーマニア語は，フランス語やイタリア語等と同様に，俗ラテン語から派生したロマンス諸語に属する言語であるが，他のロマンス諸語と共通の特徴を共有すると同時に，他には見られない独自の特徴を有するという点で，ロマンス諸語において特異な存在といえよう。

本稿が扱う直接目的語名詞句の前置詞による標示という現象も，スペイン語のある地域の方言において認められるものの，他のロマンス諸語においては観察されないルーマニア語特有の統語現象と言える。この現象は，生成文法理論において名詞句の格の扱いという中心的な問題に深く関わるもので，従来いくつかの研究がなされてきた。特に，ルーマニア語において興味深いのは，前置詞句によって直接目的語が標示される場合，その直接目的語を対格形代名詞クリティックが重複して表すというクリティック重複現象が存在するという点である。ルーマニア語においては，このクリティック重複現象が随意的であり，生成文法における格理論において重要な問題を提起している。このクリティック重複構文と，クリティック重複を伴わない文を格理論の観点から一貫して簡潔に説明し得た先行研究は存在しない。

本稿は，この両構文が呈する，前置詞句によって標示される直接目的語の格付与の問題を，生成文法の最新理論である最小主義プログラムの枠組みで，名詞句の格照合という観点から捉えなおし，両構文に対する適切な構造を提

示しつつ，両構文において一貫した形で直接目的語の照合の扱いを解決するのが目的である[1]。

1．ルーマニア語における前置詞による直接目的語の標示

1.1．直接目的語を標示する前置詞

ロマンス諸語は，ラテン語において存在していた直接目的語名詞句を標示する対格形態素を失っているという共通点を持っている。ルーマニア語もその例外ではなく，属格・与格形態素は保持しているものの，直接目的語名詞句は主語名詞句と同様無標の形式である。しかし，他の多くのロマンス諸語と異なり，ルーマニア語にはある環境において直接目的語を標示する前置詞〝pe〟が存在する[2]（以下では，この構文を〝pe〟構文と呼ぶこととする）。この前置詞は，全ての直接語名詞句を標示するわけではなく，ある特定の意味的特性を有する直接目的語の標示に用いられる。その特性は，「＋人間」もしくは「＋人称代名詞」というものである。

(1) a．L-am văzut pe Ion.
(I) him-have seen PREP Jean
b．Am văzut-o pe fata lui Ion.
(I) have seen-her PREP the-daughter of
c．Am văzut-o pe ea.
(I) have seen-her PREP her

この前置詞〝pe〟による直接目的語名詞句の標示は義務的な場合と随意的な場合がある。義務的な場合は，直接目的語が代名詞の場合である[3]。

(2) a．Se ştie pe care ai lăsat-o.
one knows PREP whom (you) have left-her

b. Pe cine ai certat?
PREP whom (you) have scolded

逆に，前置詞〝pe〟が直接目的語名詞句を標示できないのは，これが非人間である場合である。

(3) a. Văd cartea in bibliotecă.
(I) see the-book in (the) library[4]
b. Văd pisica.
(I) see the-cat

このように，直接目的語が前置詞によって標示されるかどうかは目的語名詞句の意味特性が深く関わっている。

1.2. クリティック重複

ルーマニア語の〝pe〟構文において特徴的なのは，前置詞〝pe〟によって標示される直接目的語名詞句と同一指示の対格形人称代名詞が共起する場合があるという点である。ルーマニア語における対格形代名詞は，他のロマンス諸語と同様，クリティックであり，この現象は一般にクリティック重複（clitic doubling）と呼ばれる。直接目的語代名詞クリティックのパラダイムは以下の通りである。

(4)	1人称単数	mă, m-	1人称複数	ne
	2人称単数	te	2人称複数	vă, v-
	3人称単数男性	îl, l-	3人称複数男性	îi, i
	3人称単数女性	o	3人称複数女性	le
	3人称再帰形	se		

このクリティック重複は，直接目的語が代名詞である場合には義務的であ

るのに対して，名詞句である場合には一般に随意的である[5]。

(5) a．*Am văzut pe ea.
(I) have seen PREP her
b．(L-) Am văzut pe Ion.
(I) (him-) have seen PREP
c．(Îl) Învaţ pe copil gramatica.
(I) (him) teach PREP (the) child the-grammar
d．(Îl) Trimit pe copil la părinţi.
(I) (him) send PREP (the) child to (the) parents

このクリティック重複構文は，生成文法において直接目的語名詞句の格付与（照合）という格理論の観点から非常に興味深い現象であると言える。

2．先行研究

前置詞によって標示される直接目的語の格の扱いに関しては，従来2つのタイプの分析がなされてきた。一つはスペイン語に関する Jaeggli（1986）の分析に代表されるように，直接目的語を標示する前置詞が動詞から格素性を引き継ぐというもの，もう一つは Cornilescu（1987）に代表される，前置詞が与える格と動詞に与えられる格は別に付与されるというものである。以下で，それぞれの分析の妥当性を議論する。

2.1．前置詞による格素性の引継ぎ

Jaeggli（1986）は，直接目的語を標示する前置詞は，対格素性を持つ他動詞から格素性を引き継ぎ，その格を自身の目的語に付与すると主張している。この分析の利点は，クリティック重複を伴わない構文において，格付与子と被格付与子が1対1対応となっており，GB 理論における格理論上の問題が生じないという点である。これは，格付与が ϕ 素性の照合という概念によっ

て捉え直されている最小主義プログラムにおいても重要である。最小主義プログラムでは，格は ϕ 素性として扱われ，名詞句と動詞の両方がその素性を持ち，両者が照合されることによって合法的な文になると考えられている。従って，照合するもの同士の1対1対応が重要な要因となる。この点で，クリティック重複を伴わない文の場合，Jaeggli の分析は理論的に妥当なものである。

しかしながら，この分析ではクリティック重複構文において問題が生じる。すなわち，格付与子が動詞のみであるのに対して，被格付与子が前置詞によって標示される名詞句とクリティックの2つになるからである。動詞から前置詞への格素性の転送が行われるにせよ，本来の格付与子は動詞であるので，最小主義プログラムの枠組みで格照合がどのように行われるかが問題となる。

また，後の分析で触れるように，直接目的語を標示する前置詞〝pe〟は，斜格的な機能を持つ場合もある。ルーマニア語の前置詞〝pe〟によって支配される名詞句は，直接目的語であれ斜格的名詞句であれこの制約に従う。従って，この前置詞が対格を付与するとは考えにくく，経験的にもこの分析には問題があると言える。

2.2. 前置詞の独自の格付与

Cornilescu (1987) は，直接目的語を標示する前置詞は他動詞とは独立して格を付与すると分析をする。この分析は，Jaeggli とは逆に，クリティック重複構文の分析において理論的に妥当なものである。すなわち，クリティックに対しては他動詞が，前置詞によって標示される直接目的語に対しては前置詞がそれぞれ独立して格を付与することになり，格付与子と被格付与子との1対1対応が厳守されるからである。最小主義プログラムの観点からは，それぞれの ϕ 素性が独自に照合されると読み替えることができる。

これに対して，この分析はクリティック重複を伴わない構文の場合に理論的問題が生じることになる。Cornilescu は，クリティック重複を伴わない文においては，前置詞によって標示される直接目的語が前置詞と動詞とに余剰

的に格を付与されると主張するが，最小主義プログラムの枠組みにおいてこの分析を維持するのは困難である。前置詞と動詞が同じ ϕ 素性を持つということは理論上考えにくく，何らかの特別な仮定が必要となってくるからである。

このように，クリティック重複構文とクリティック重複を伴わない文の両方を最小主義プログラムの枠組みで捉えなおすことのできる分析は存在しない。

3．直接目的語が前置詞〝pe〟によって標示される文の構造

本稿では，クリティック重複を伴う他動詞構文とクリティック重複を伴わない他動詞構文に対して統一的な構造を与え，これら二つの構文における直接目的語名詞句の格照合について一貫した説明を与えることを目的とする。

本節では，1節において観察した，ルーマニア語における直接目的語が前置詞〝pe〟によって標示される文を分析する上で，目的語 DP の照合がいかにして行われるかを考慮しながら，本稿が提案する文の構造を提示する。まず，ルーマニア語に特徴的な文であるクリティック重複構文を考察し，その後，クリティックの重複を伴わない構文を，クリティック重複構文との関係において統一的な観点から分析する。

3.1．クリティック重複構文における目的語名詞句の格照合

直接目的語を含む文の構造を考察する上で，本稿は他動詞を主要部とする動詞句の構造に関しては，Chomsky (1995) において提案されている VP 殻 (VP-shell) 構造を採用する。一般的には，主語 DP は VP 殻構造における上位の投射である vP の指定部に，直接目的語 DP は VP 殻構造における下位の投射である VP の補部にそれぞれ生成される。それぞれの DP の ϕ 素性は，対応する ϕ 素性を持つ動詞要素によって局所的な位置関係において照合される。

直接目的語 DP が前置詞〝pe〟によって標示され，対格形クリティックに

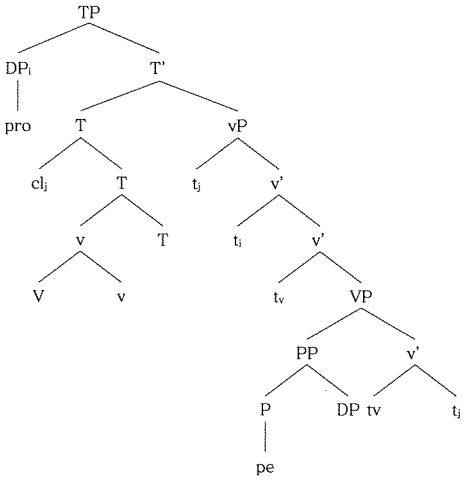
よって重複されるクリティック重複構文について，本稿では，Cornilescu と同様，動詞句の指定部において動詞と照合関係を持つのは対格形クリティックであり，前置詞〝pe〟によって標示される目的語 DP は，通常の前置詞句の場合と同様，自身が含まれる〝pe〟を主要部とする前置詞句内において照合されると提案する。Chomsky (1995) の枠組みにおいては，一つの投射が複数の指定部を持つことが可能であり，これによって上位の vP が二つの指定部を持ち，一方の指定部には主語 DP が生成され，もう一方の指定部において目的語 DP の照合がなされることになる。このように考えると，先行研究において問題となっていた，一つの動詞句において二つの直接目的語の照合をどのようにして行うのかという理論的問題が解決される。

ここで問題となるのは，前置詞〝pe〟によって標示される名詞句と同一指示の対格形クリティックの統語的ステイタスである。この対格形クリティックは基底においてどのような位置に生成されるのであろうか。一つの可能性は，それぞれ別の補部として動詞に選択され，お互い独立した要素として生成され，何らかの手段によって同一指標付けされるという考え方であろう。例えば，クリティックは VP の補部に，前置詞句は vP 指定部に生成されるという構造が考えられる。この考え方を採用すれば，(6)の例文の顕在構造における派生は(7)のようになろう[6]。

(6) Îl întreb pe Vasile.[7]
(I) him ask PREP

この構造において，直接目的語クリティックは顕在構造（overt syntax）において，vP 指定部において照合を終えた後，動詞要素である主要部 T の位置に付加する。これは，Fujita (1999) においてフランス語の代名詞クリティックに関して提案されている，クリティックが顕在構造において動詞要素に付加しなければならないという形態的条件を満たすためであると考えることができる。従って，クリティックは定動詞に後続するのではなく，定動詞に先行するという語順になるのである。

(7)

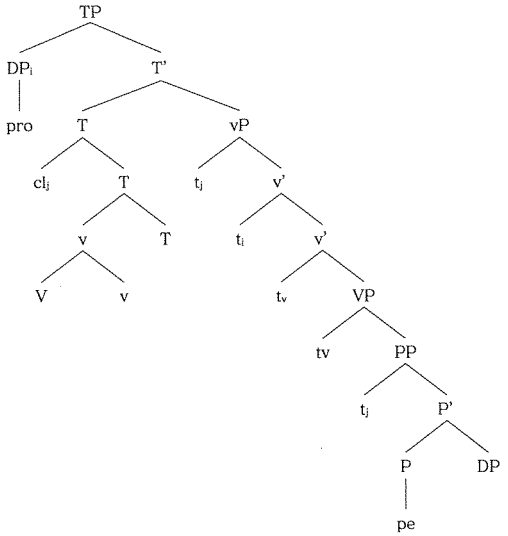


しかし，この構造には理論的に問題がある。それは，動詞〝a întreba〟が動作主と対象という二つの意味役割を与えるという意味特性を持っているにもかかわらず，統語構造上3つの要素を項として取っているという点である。意味役割の点から考えれば，〝pe〟によって標示される名詞句とこれと同一指示のクリティックは同一の項であり，別々の独立した項ではない。この両者が，統語構造上全く関係付けられない位置に独立して生成されるような構造は妥当性を欠くと言わざるを得ない。

そこで，本稿では，動詞の項としてVP補部に生成されるのは，前置詞〝pe〟を主要部とする前置詞句であり，これと同一指示の代名詞クリティックはこの前置詞句内に生成されると考えたい。具体的には，前置詞句の指定部に生成され，自身の格照合のために，通常の直接目的語名詞句のようにvP指定部に移動すると仮定する。この仮定に従うと，(6)の例文に対応する顕在構造での派生は(8)に示されるようになる。前置詞の目的語名詞句と代名詞クリティックの同一指示関係については，クリティックの素性が顕在構造においてC主要部に移動し，C主要部が二つの名詞句との素性照合を行うことに

よって保証されると考える[8]。

(8)



この分析の重要な点は，直接目的語を標示する前置詞〝pe〟を主要部とする前置詞句を，通常の前置詞句と全く同じように扱うということである。この点で，本稿の分析はCornilescu(1987)の分析を踏襲している。クリティック重複構文の分析において，本稿とCornilescu（1987）で異なるのは，クリティックが基底生成される位置ということになる。

このような分析の根拠として，直接目的語を標示する前置詞〝pe〟は，通常の前置詞と全く同じ統語的特徴を示すという事実が挙げられる。ルーマニア語においては，前置詞に支配される名詞句が単独で生起する定名詞句の場合，他の統語的位置では生起する定冠詞が生起できないという統語的制約が存在する。

(9) Cărțile sunt în birou/*biroul.
the-books are in study/ the-study

前置詞〝pe〟は直接目的語を標示するのみでなく，場所を表す等のいわゆる斜格的な機能も持っている。そして，斜格標示・対格標示いずれの場合も上述の統語的制約に従う。

(10) Pun o carte pe raft/*raftul.
(I) put a book on shelf/the-shelf

もし，Jaeggli (1983) が主張するように，前置詞〝pe〟が対格を他動詞から引き継ぎ，その目的語に付与するのであれば，対格標示の場合には，斜格標示と異なり，通常の他動詞の直接目的語と同様定冠詞が生起することが予想される。この事実は，このような分析が妥当ではないということを示していると言えよう。

以上の分析により，従来の研究において解決されなかった，前置詞に標示される名詞句とこれと同一指標の代名詞クリティックの格照合の問題が解決されるとともに，意味役割の観点からも妥当な構造が提示されることになる。

3.2. クリティック重複を伴わない構文における目的語名詞句の照合

ルーマニア語においては，3.1で議論したクリティック重複構文と並んで，クリティック重複を伴わずに直接目的語が前置詞〝pe〟によって標示される構文が存在する。次に，この構文における目的語DPの照合について考えてみよう。

クリティック重複構文において仮定したのと同様に，前置詞〝pe〟によってマークされる直接目的語DPは，自身が含まれる前置詞句内で照合されると考えねばならない。クリティック重複を伴う構文と伴わない構文において前置詞〝pe〟を主要部とする前置詞句の性質が異なると考えるのは不自然である。もし両構文における，前置詞〝pe〟によって標示される目的語DPの

照合の方法が異なっていると考えるとすると，一貫性のない説明となり，妥当性を欠くことになるからである。

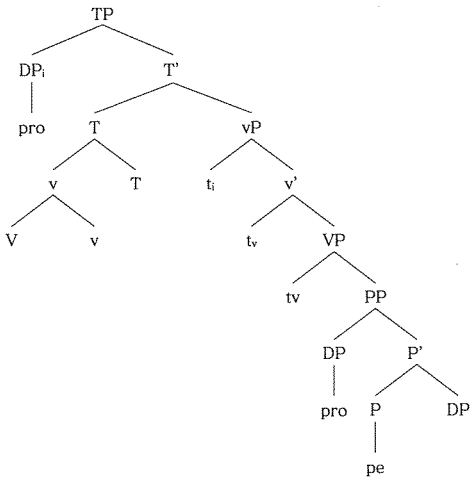
この仮定によって含意されるのは，前置詞〝pe〟によって標示される直接目的語DPがvP指定部において照合されるのではないということである。主要部vはϕ素性を持っており，この素性は顕在構造において，直接目的語の位置，すなわちこの場合にはVP補部の位置に生成されるDPが持つ，対応するϕ素性と照合されねばならない。このϕ素性は，Cornilescuが主張するように前置詞句によって標示される直接目的語のものではありえない。このϕ素性は前置詞のそれと照合されるからである。では，vと格照合されるのはどのDPであろうか。本稿では，それは音韻的に空のproであると仮定する。このproは，クリティック重複構文においてクリティックが生成される位置，すなわち前置詞句の指定部に生成される。前置詞〝pe〟によって標示されるDPと同一指標を持っており，このproのϕ素性がvのそれと照合されるのである。例文(11)の顕在構造における派生を(12)に示す。

(11) Întreb pe Vasile.
(I) ask PREP

proは通常の人称代名詞と同じ統語的特性を有するので，クリティックのように顕在構造において格照合をする必要がない。従って，経済性の原理により，LFにおける素性移動によって格照合がなされる。

このように仮定すると，Chomsky (1995) の枠組みにおいてクリティック重複構文とクリティック重複を伴わない構文に対して統一的な構造を与えると同時に，クリティック重複構文における直接目的語DPの格の処理の問題，すなわち格照合の問題を解決することが可能となる。本稿の分析は，前置詞句内に生成されるクリティックDPのϕ素性と主要部vのそれの照合という観点から，理論的に妥当なものである。

(12)



4．直接目的語 DP が演算子である場合の照合

前節では，本稿が提案するルーマニア語の他動詞文の構造を提示し，前置詞〝pe〟によって標示される直接目的語 DP の照合がいかにして行われるかを分析した。本節では，前節での分析をもとに，直接目的語が演算子移動する文の構造を考え，平叙文とまったく同じ分析が可能であると同時に，これらの構文において観察されるクリティック重複に関する興味深い分布も，本稿の分析で自然に説明されることを示す。

4.1．疑問代名詞

ルーマニア語では，人間を表す直接目的語疑問代名詞は必ず前置詞〝pe〟を伴わねばならず，〝pe〟を伴わない疑問代名詞を含む文は非文である。この構文で，クリティックによる重複は随意的である。まず，クリティック重複の構文，次にクリティック重複を伴わない構文を考察する。

4.1.1. クリティック重複構文

疑問詞を含む文と平叙文との間で，補語の生成される位置が異なると考えるのは理論上不自然である。本稿では，平叙文の場合と全く同様に，クリティック重複構文において，〝pe〟によって標示される直接目的語疑問代名詞はPPとしてVP殻構造のVP補部に生成され，この疑問代名詞と同一指標を持つクリティックはこのPPの指定部に生成されると考える。クリティックは照合のためvPの2番目の指定部に移動し，その後，既に述べた自身の形態的条件を満たすために動詞要素に付加する。前置詞〝pe〟によって標示された目的語疑問代名詞は，PP内において照合されるので，vP指定部を経由することなく，CP指定部に直接移動し疑問素性の照合を受ける。従って，疑問代名詞の演算子の変項として機能するのはクリティックではなく，疑問代名詞を含むPPの痕跡である。(13)の例における補文についてのスペルアウト以前の派生を(14)に示す。

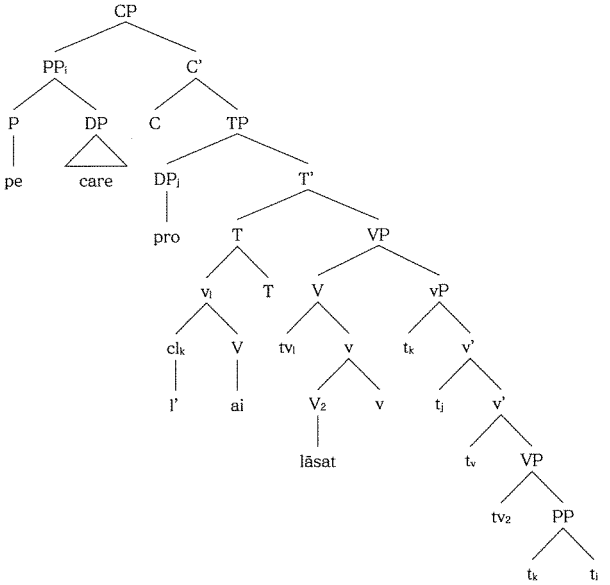
(13) se ştie pe care l'ai lăsat.
one knows PREP whom (you) him-have left

本稿の分析は，何ら特別な仮定を必要とせずに，ルーマニア語における目的語疑問代名詞を含むクリティック重複の現象を，クリティック重複現象を持たない言語における対応する疑問代名詞構文と全く平行的に説明することができるという利点を持つ。(15)に示す英語とフランス語がその一例である。

(15) a. What did you read in the library?
b. Je me demande qui tu as vu.
I me ask whom you have seen

もし逆に，先行研究のように，〝pe〟によって標示される疑問代名詞とこの代名詞と同一指標を持つクリティックが同じ格をもつ，すなわち最小主義プログラムの観点から述べると同じ主要部と照合されると仮定すると，疑問代

(14)



名詞の変項の扱いに関して特別な仮定を必要とすることになり，分析の妥当性を減ずることになる。

上に示した構造では，動詞の過去分詞形〝lăsat〞が助動詞〝ai〞の位置まで移動し，〝ai〞は照合のために主要部Tにexcorporateしている。この移動は，女性形直接目的語クリティック〝o〞が過去分詞の右側にクリティック化する事実によって例証される。

(16) se ştie pe care ai lăsat-o.
one knows PREP whom (you) have left-her

もし過去分詞形の動詞が主要部vの位置に留まっているとすると，クリティックは，照合されるvP指定部の位置からvの位置に下向きに移動することになり，理論的に禁じられている下向き移動（lowering movement）に

なってしまうからである。このクリティック〝o〟の過去分詞形の動詞に対する後接の例は，ルーマニア語において過去分詞形の動詞が顕在構造において助動詞の主要部の位置まで移動していることを示している。

4.1.2. クリティック重複を伴わない構文

次にクリティック重複を伴わない直接目的語代名詞を含む文について考察する。既に提示した平叙文に関する本稿の分析に従い，クリティックの重複なしで直接目的語が前置詞〝pe〟によって標示される文では，PP 指定部の位置に空の代名詞 pro が生成されると考える。〝pe〟によって標示される疑問代名詞は，クリティック重複構文の場合と同様，VP 殻構造における下位の VP 補部に生成され，疑問素性を照合するために CP 指定部に移動する。疑問代名詞の演算子の変項として機能するのは，この場合も当該疑問代名詞を含む前置詞句の痕跡である。(17)の例文の顕在構造における構造を(18)に示す。

(17) Pe cine ai certat?
PREP whom have (you) scolded

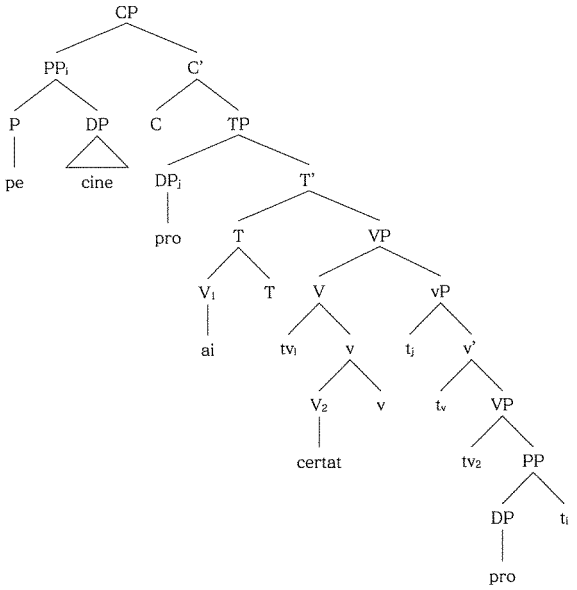
クリティックの重複を含む文と含まない文で異なるのは，唯一，VP 指定部に生成される要素が，前者ではクリティック，後者では代名詞 pro であるという点である。本稿の分析では，両構文が同一の構造を持つことになり，平叙文において分析したのと全く同様に，特別な仮定をすることなく，両構文を一貫した観点で分析することが可能となる。

4.2. 関係代名詞

疑問代名詞を含む文と比較して，関係代名詞節の場合に重要なことは，クリティックの重複が義務的であるという点である。

(19) omul pe care *(l')am văzut
the-man PREP which (I) him-have seen

(18)



関係節の構造も，前項で議論したクリティック重複を伴う疑問代名詞を含む文の構造と全く同一であると考えることができる。疑問詞に関して議論したのと同様に，関係節の場合も関係代名詞の演算子の変項として機能するのは前置詞句の痕跡であって，クリティックではない。

ここで，関係節においてクリティックの重複が義務的であるのに対し，疑問代名詞を含む文で随意的であるのはなぜかという点が問題となる。両構文において根本的に異なるのは，前者においては先行詞が存在し，関係代名詞が常にこれと形態的に一致しなければならないのに対し，後者においては一致すべき DP がないので一致が行われないということである。ルーマニア語においては，この先行詞と関係代名詞の一致関係が顕在構造においてなされることが次の例によって示される。

(20) a. doctorul căruia i-am scris
the-doctor whom (I) him-have written
b. studenta căreia i-ați trimis cartea
the-student (f.) whom (you) her-have sent the-book

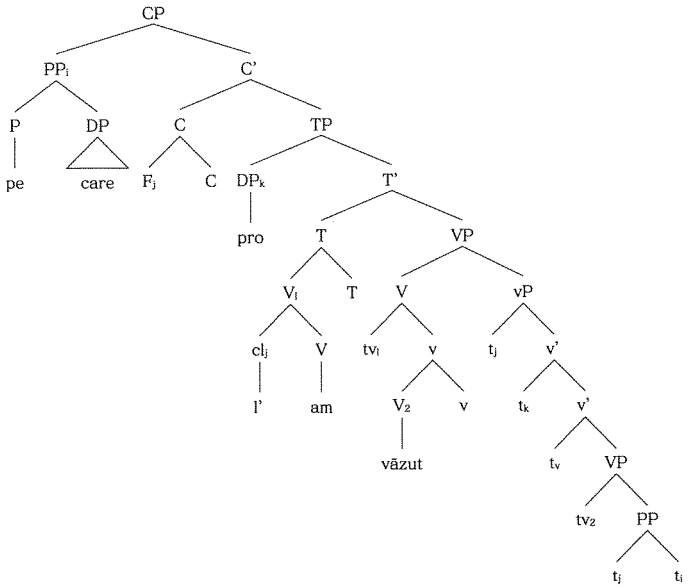
(20 a) においては，先行詞〝doctorul〟の主要部が男性名詞であるため，先行詞の性・数に一致して男性単数形の与格形関係代名詞〝căruia〟が用いられている。(20 b) では，女性形の先行詞〝studenta〟に一致して，女性単数形の与格形関係代名詞〝căreia〟が用いられている。この先行詞と関係代名詞との形態的一致は，顕在構造における統語的な一致が具現化したものであると考えられる。

本稿では，この関係代名詞と先行詞との形態的一致は，顕在構造において主要部Cを介してなされる両者の素性に関する一致 (Chomsky (2000) における agree) の具現化であり，この素性一致が関係代名詞の疑問素性の主要部Cとの照合のための必要条件であると考える。この仮定を踏まえ，クリティックとの関係付けを以下のように考えたい。既に見たように，ルーマニア語においては，前置詞〝pe〟によって標示される直接目的語 DP は重複するクリティックと同一指標を持つ関係にあり，この関係は，統語的に保証されねばならない。そこで，この両者の関係付けが，顕在構造における関係代名詞の先行詞との素性一致のために，関係代名詞と同一指示である名詞句の素性も顕在構造においてC主要部へ移動し，先行詞との素性一致が行われることによって確立されると考えよう。すると，この名詞句は，素性移動のために顕在構造においてC主要部と局所的な位置関係を持たねばならないことになる。クリティックはその形態的特性を満たすため，動詞要素に付加しており，この動詞要素はT主要部への顕在的移動により主要部Cと局所的な関係にある。従って，顕在構造におけるクリティックの素性移動が問題なく行われ，主要部C内にあるクリティックの素性と指定部にある関係代名詞の素性が同時に先行詞と素性一致を行うことが可能となる。この結果，関係代名詞の疑問素性のための条件が整い，疑問素性照合が行われるということになる。以

下に，(19)のクリティック重複を含む文法的な文の顕在構造における構造を(21)に示す[9]。

(19) omul pe care l'am văzut

(21)



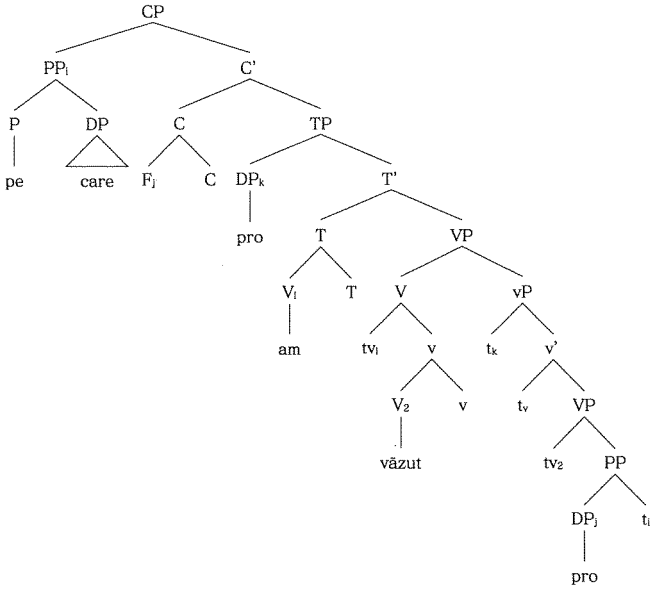
もしこれとは逆に，クリティック重複がなされない文の場合はどうであろうか。

(19) *omul pe care am văzut

この場合，クリティックではなくproが〝pe〟を主要部とする前置詞句の指定部に生成されることになる。proは，クリティックとは異なり，通常のDPと同じように顕在構造において照合されるという特性を持っていない。この

ような要素は，経済性の原理によって，LF において照合されねばならないからである。従って，スペルアウト以前には PP 指定部に留まったままであり，C主要部との局所的関係を持つことができないために，C主要部への素性移動が不可能となる。従って，クリティック重複を伴わない構文では，関係代名詞と同一指示の名詞句の素性が顕在構造において先行詞と一致がなされないことから，疑問素性の照合が不可能となり，直接目的語関係代名詞がクリティックによって重複されない文が非文となるのである。(22)にその構造を示す。

(22)



このように，前置詞〝pe〟によって標示される DP の照合とそれと同一指標を持つクリティックの照合を区別する本稿の分析は，直接目的語関係代名詞節においてクリティックの重複が義務的であるという事実を簡潔に説明することが可能なのである。

4.3. 他のロマンス諸語における関係代名詞とC主要部の素性照合

関係節での〝pe〟構文の分析で，関係代名詞とC主要部の疑問素性の照合が行われるために，関係代名詞及びこれと同一指示の要素とC主要部が素性照合を行うことが必要条件であると議論した。ここでは，この関係代名詞の認可条件が，ルーマニア語だけではなく他のロマンス諸語においても見られる一般性の高いものであることを示す。

上記の仮説の根拠となったのは，ルーマニア語において先行詞と性・数一致をする関係代名詞が存在するという事実であった。これは，C主要部と関係代名詞，C主要部と先行詞（の主要部）がそれぞれ顕在構造において局所的位置関係にあり，それに基づいてそれぞれの ϕ 素性が適切に照合されることによって関係節として統語的に保証されるというものである。

この統語的な先行詞と関係代名詞の素性照合を具現化するものとして，フランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語にも先行詞と形態的に一致する関係代名詞が存在する。(23 a) はフランス語，(23 b) はイタリア語，(23 c) はスペイン語，(23 d) はポルトガル語の例である。

(23) a. les lettres auxquelles je dois répondre
the letters to-which-f.pl. I must answer

b. gli studenti ai quali insegno matematica
the students to whom-m.pl. (I) teach mathematics

c. la actriz con la que se casó el ricacho
the actress to(with) whom-f.sg. get married the new rich

d. os nossos vizinhos com os quais nos damos há anos
(the) our naighbours with whom-m.pl. (we) get-on for years

ルーマニア語とこれらの言語における違いは，クリティック重複現象が見られないということであるが，これはルーマニア語の関係代名詞の性質が他

言語のそれと異なるからでは決してない。あくまで，ルーマニア語において存在する〝pe〟構文という特殊な構文の特性によるものである。これらの例は，本稿が提案する関係代名詞の認可条件がルーマニア語のみに見られる特性ではなく，ロマンス諸語において広く共有される一般的特性であり，アドホックな仮説ではないことを示している。

以上，3節で提案した〝pe〟構文の分析をもとに，演算子移動が関与する二つの構文を分析した。本稿の分析は，疑問詞構文と関係代名詞構文に統語的に全く同一の統語構造を与えつつ，関係代名詞構文においてのみ観察される分布上の制約を，関係詞にのみ課される疑問素性の照合のための必要条件という観点から捉えられることを示した。この条件は，ルーマニア語のみならず多くのロマンス諸語において共有される一般的なものであることも議論した。一見異なる両構文におけるクリティックの分布も，それぞれの構文の構造やクリティックの特性の違いというアドホックな仮定に立つことなく，最小の仮定のみで説明することが可能となり，3節で提示した〝pe〟構文の分析を支持するものである。

5．結論

本稿は，直接目的語の前置詞標示という統語上極めて重要な意味を持つルーマニア語における〝pe〟構文の統語構造を，ルーマニア語に特徴的なクリティック重複現象と関連付けながら最小主義プログラムの枠組に基づいて提示した。

従来主張されてきた分析とは逆に，クリティック重複が見られる構文が〝pe〟構文の統語構造の本質を具現化したものであると考え，直接目的語を含む前置詞句が動詞の補部の位置に，直接目的語と同一指示の代名詞クリティックは前置詞句の指定部の位置にそれぞれ生成されると仮定した。このように仮定することによって，クリティックは動詞句の指定部において通常の目的語と同様に格照合を受け，前置詞によって標示される直接目的語名詞句は通常の前置詞句の場合と同様に前置詞句内で格照合を受けると考えるこ

とが可能となり，従来の分析に存在した二つのDPの格照合の扱いに関する問題が解決されることになる。

クリティック重複が見られない構文については，従来考えられていたような単純な他動詞構文の構造ではなく，クリティック重複構文においてクリティックが生起する位置に空の代名詞を仮定すべきであることを議論した。これによって，クリティック重複が見られる場合と見られない場合とで〝pe〟構文に対してアドホックな相違を仮定することなく，両構文を平行的に捉え〝pe〟構文に対して一貫した統語構造を与えることが可能となるのである。

更に，このような分析は理論的に望ましいばかりでなく経験的にも支持されることを，直接目的語が演算子である例を分析することによって示した。特に，直接目的語が関係代名詞である場合に，関係代名詞とC主要部の素性照合というロマンス諸語一般に見られる普遍的な認可条件と本稿での〝pe〟構文に対する分析を組み合わせることによって，直接目的語が関係代名詞である場合クリティック重複が義務的であるという事実を簡潔に説明できることを示した。

ロマンス諸語においてクリティック重複を示すもう一つの言語であるスペイン語においても直説目的語を標示する前置詞が存在するという事実は，本稿が分析したルーマニア語の〝pe〟構文の構造がルーマニア語のみに存在する特定的なものではないことを示唆している。今後は，スペイン語におけるクリティック重複現象との対照的考察という観点から本稿での分析の妥当性を検証すると同時に，ルーマニア語において観察される他の統語現象，特に直接目的語の前置構文との関連性を考察することによって，〝pe〟構文の統語的特性を更に明らかにすることを課題としたい。

参考文献

Burzio, Luigi (1986), *Italian Syntax*, Reidel.
Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, The MIT Press.
—— (2000), "Minimalist Inquiries: The Framework, In Roger Martin et al. (eds.) *Step*

by Step, The MIT Press.

Cornilescu, Alexandra (1987), "A Note on Dative Clitics and Dative Case in Romanian", *Revue Roumaine de Linguistique tome XXXII.*

—— (2000), "Notes of the interpretation of the Prepositional Accusative in Romanian," *Bucharest Working Papers in Linguistics.*

Dobrovie-Sorin, Carmen (1987), *Syntaxe du Roumain - Chaînes thématiques*, thèse de doctorat, Université Paris 7.

—— (1994), *The Syntax of Romanian*, Mouton de Gruyter.

—— (1999), "Clitics across categories: The case of Romanian", In van Riemsdijk, H. (ed.) *Clitics in the Languages of Europe*, Mouton de Gruyter.

Fujita, Takeshi (1999), "Les pronoms clitiques non-réfléchis en français", *Journal of the Linguistic Society of Japan* 115.

Gierling, Diana (1994), "Clitic Doubling- Specificity and Focus in Romanian," In *Virginia Motapanyane.*

Ionescu, Emil (2000), "The Role of PE in the Direct Object Construction in Romanian," *Bucharest Working Papers in Linguistics.*

Jaeggli, O. (1986), "Three Issues in The Theory of Clitics: Case, Doubled NPs, and Extraction, In Borer, H. (ed.) *The Syntax of Pronominal Clitics*, Academic Press.

Jones, M.A. (1996), *Foundations of French syntax*, Cambridge University Press.

Kayne, Richard S. (1977), Syntaxe du Français, Seuil.

—— (1991), "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO", *Linguistic Inquiry* 22.

Legendre, Geraldine (2000), "Optimal Romanian clitics: a cross-linguistic perspective", In Montapanyane, V. (ed.) *Comparative studies in Romanian syntax*, North-Holland.

Luján, Marta and Claudia Parodi (2001), "Clitic-doubling and the acquisition of agreement in Spanish", In Gutiérrez-Rexach, J. et al. (eds.) *Current Issues in Spanish syntax and Semantics*, Mouton de Gruyter.

Roberts, Ian (1997), *Comparative Syntax*, Arnold.

Torrego, Esther (1998), *The Dependencies of Objects*, The MIT Press.

Uriagereka, Juan (1995), "Aspects of the Syntax of Clitic Placement in Western Romance", *Linguistic Inquiry* 26

註記

[1] ルーマニア人のインフォーマントとして Manuela Leahu，Alexandru Mardale 両氏に御協力頂いた。ここに謝意を表したい。

[2] スペイン語にも直接目的語名詞句を標示する前置詞が存在する。これは間接目的語名詞句を標示するものと同一の形式である前置詞〝a〟で，人間を表す名詞句に限られて用いられる。

Quiero mucho a Carmen.
(I) love much to

ルーマニア語と異なるのは，スペイン本国や大多数の中南米で話されているスペイン語ではクリティック重複現象が観察されないという点である。

[3] 他に，義務的な場合と随意的な場合を分ける意味特性として特定性がある。詳しくは，Cornilescu (2000) を参照のこと。

[4] ルーマニア語においては，単独の名詞が前置詞の目的語となる場合，定冠詞が省略されるという統語規則が存在する。

[5] クリティックが重複される構文の方が一般に好まれる。

[6] ルーマニア語では，他の多くのロマンス諸語と同様，動詞形態が豊富であり，主要部 T が Chomsky (1995) における意味での解釈不可能な EPP 素性を持っているので，主語 DP は顕在構造において照合を受けるため TP 指定部に移動しなければならない。VP 殻構造においては，下位の V が上位の v に移動し，上位の V は T まで移動する。

[7] ルーマニア語は，イタリア語やスペイン語と同様プロドロップ言語であり，音韻的に空の主語 pro の生起が可能である。

[8] 一致に関する詳細な議論は，後の節の関係節に関する分析を参照されたい。

[9] 疑問詞に関する議論で既に述べたように，直接目的語クリティックが 3 人称単数女性形の場合，助動詞に前接するのではなく，過去分詞形の本動詞に後接される。この場合，クリティックは顕在構造において，助動詞の位置まで上がるのではなく，本動詞の過去分詞形が位置する v 主要部に留まることになり，C 主要部と局所的位置関係にはない。このような場合の素性移動がどのようにしてなされるかに関してはいくつかの可能性があるが，ここではクリティックの素性が局所的に T 主要部に上昇し，C 主要部と T 主要部という機能範疇同士の一致操作（Chomsky (2000) における agree）によってクリティックの素性照合が行われると考えておく。